虚構(フィクション)と違い、現実(リアル)に劇的(ドラマチック)な事など、そうそう起こらない。

単調な日々の繰り返し。それが普通。

むしろ、何不自由なく、平穏に送れているなら、それはまだ幸せな部類だろう。世の中は不幸や理不尽で溢れているのだから。

だからといって、実感も出来ないようなささやかな幸せに、人間は満足など出来ない。

常に新たな刺激を求める。

退屈は人を殺さないが、心は殺せる。

ただ繰り返されるだけの日々では、精神を病んでしまう。

どれだけ身体(からだ)が健康だろうと、それだけでは満たされない。

だからこそ、理由付けをして行事(イベント)を行い、生活に彩(いろど)りを加えようと試行錯誤する。

日本人は特にその傾向が強い。

何かと理由を付けては騒ぎたがるが、逆に言えば、口実がなければ騒げない真面目な人種なのだろう。普段は興味のないスポーツの祭典にはしゃいだり、バレンタインやクリスマスのような、由来も宗教も関係ない記念日に便乗するしかないのだから。

本心では他者と一緒に盛り上がりたい、気持ちを共有したい、でも出来ない。それでいて、他人を無視する事も出来ない。自分と違う意見の人間を攻撃したり、非難せずにはいられない。

この国の人間は本当に面倒くさいと思う。

で、何が言いたいかといえば――今日はいつの間にか世間に定着したハロウィンだという、ただそれだけ。

４戦目

『恋する妹はせつなくて兄さんを想うとすぐ××しちゃうの』

俺の名前は 橘(たちばな) アサト。ゾイエス学園高等部の三年生だ。

物語の導入部分の 独白(モノローグ) であれば、ここでヒロインなどが隣にいて、その紹介をするところなのだが――俺は一人で下校していた。ヒロインかどうかはさておき、三人の少女達と同居しているため、普段は誰かしら一緒に下校する事が多いのだが、彼女等は仕事に駆り出されている

今日は十月三十一日。

ハロウィンである。

本来は収穫祭で、海外のイベントなのだが、近年になって、なぜか急に一般層にもメジャーになった。普通に仮装グッズが売られるようになったし、騒ぐのが大好きなパーリーピーポーは、街を仮装して練り歩くらしい。

世も末だ。

とはいえ、同居人達の『仕事』というのも、そのハロウィン関連らしい。よく判らない雇い主の指示で、仮装(コスプレ)をするような事を言っていた。

それはそれで見てみたい。

そんな事を思っている間に自宅が見えてきたので、鍵の準備をしつつ歩みを進める。

しかし――

「……ん？」

鍵が開いている。登校する際は施錠(せじょう)を確認しているので、同居人の誰かが用事を思い出して帰っているのだろうと判断する。それぞれに合鍵を持たせてあるのだ。

「ただい――」

一応、家人が帰ってきた事を知らせるため、この手の挨拶(あいさつ)は決まり事になっている。共同生活の基本だろう。

なぜ、俺の言葉が尻切れになったのか？　別に、『ま』を言うのが面倒になったからではない。さすがに、そこまで怠惰じゃない。

ただ、玄関の扉を開けると、思いがけない人物が出迎えてくれたからだ。

高校生くらいの少女である。

長い黒髪のサイドを、頬(ほお)の辺りで揃(そろ)えた特徴的な髪型――いわゆる『姫カット』。静謐(せいひつ)な色を湛(たた)えた、黒瑪瑙(オニキス)のような黒い瞳。派手ではないが、隙なく整った容姿は、美少女と言っても文句は出ないだろう。

細身だが、出るべき所は出ており、年頃の少女としては理想形だと思わせるスタイルだ。

この時点で、同居している三姉妹の末っ子・ベアトリーチェではない。

黒髪ではあるが、長女のヤミヒメでもない。

スタイルは一番近いが、次女のタオエンは銀髪である。
というか、彼女等の誰かであれば驚かない。
では不法侵入者かと問われれば、それも違う。目の前の少女を知っているし、彼女はこの家の鍵を持っていて、無断で入る権利も有しているのだから。

「――おかえりなさい、兄さん」

少女がにこりと笑い、俺に向けて言った。
彼女の名前は橘（たちばな） カナコ。
俺の妹だ。
タオエンと同じゾイエス学園高等部の一年生で、今は短期留学で海外に行っているはずなのだが……。
「なんで、いるんだ？」
「留学期間が終わったからです。兄さんと会えない一ヶ月は、とても長く感じられました」
カナコの口から出た期間に、俺は違和感を覚えた。
「一ヶ月……え、もっと長くなかったか？」
そう。カナコが家にいなかった期間が、一ヶ月どころじゃなかった気がするのだ。確かに留学期間は一ヶ月だと聞かされていた。だが、もっと長期間、それこそ、年単位で家を空けていたような気がする……。
「――ふふ」
「なんだ、その意味ありげな笑いは」
カナコは俺のすぐ目の前まで来ると、上目遣いで、どこか恍惚（こうこつ）とした表情を浮かべていた。瞳はわずかに潤んでいて、頬（ほお）もほんのりと上気しているように見える。
「私に会えなかった一ヶ月が、兄さんにとってはとても長かったんですね」
「いや、そういう事じゃなく――」
「もう、兄さんは私を好きすぎですね。少し心配になってしまいます――色々な意味で」
俺の言葉を遮（さえぎ）り、カナコは少しだけ困ったような表情を浮かべる。だが、言葉とは裏腹に、嫌悪の色はまるでなく、むしろ喜んでいるように見える。
「でも、それはお互い様です。この一ヶ月、私も一日千秋の思いで過ごしていましたから……」
不意に、カナコが俺に身を寄せてきた。小さな両手を俺の両肩に当て、顔を胸元に埋（うず）めてくる。

まるで、恋人にしなだれかかるように。

「はあ……久しぶりの兄さんの温(ぬく)もり、匂い――」

「っ！」

服の上からとはいえ、息がかかるような密着状態で身動(みじろ)ぎされると、こそばゆいものがある。しかも、熱に浮かされたような声音で言われると、妙な気分になる。密着されているため見えないが、今のカナコは、少年誌であれば発禁をくらうような蕩(とろ)け顔をしているのではないかと思わせる。

この光景を、事情を知らない第三者が見れば、間違いなく男女の関係だと思うだろう。

実際、カナコが俺に対して抱いている感情は、妹が兄に向けるようなそれではない。

では、俺の事を異性として見ているのかと問われれば、それも自信がない。

家族といっても、結局は他人だ。完全に理解など出来るはずもない。

俺自身、カナコの事をどう思っているのか判らなかったりする。

妹として可愛いとは思うし、異性として魅力的だとも思う。だからといって、性欲の対象として見ている訳ではないし、それでいて、もしカナコの方から迫られたりしたら、拒(こば)まないとも思う。

普通の兄妹であれば、ありえない。

それこそ虚構(フィクション)だ。

だが、事実として、俺達は普通の兄妹とは違った感情をお互いに抱いている。

それが『家族愛(アガペー)』なのか『性愛(エロス)』なのかは、未だに判然としていない。

……。

束の間の静寂が訪れる。

時折、扉の外から車のエンジン音などが遠く聞こえる。壁一枚を隔てているだけで、外の世界は変わらず存在しているのだと、俺達に知らせるように。

「――カナコ、そろそろ」

「……はい。そうですね」

そろそろ潮時だろうと俺が告げると、カナコはあっさりと聞き分けてくれる。少し名残り惜しそうに、しかし、切り替えるように俺から離れると、普段の静謐(せいひつ)な少女――妹の顔になる。

カナコも判っているのだ、今はこの関係を崩すべきではないと。

お互い、何の責任も取れない学生風情(ふぜい)なのだから。

「なあ、今更だけど――なんで和装なんだ？」

本当に今更だが、カナコは上が白い振袖(ふりそで)、下は黒い袴(はかま)を穿(は)いている。普段から家では

そういうファッションという訳でも、当然ない。

「どうですか？　似合います？」

くるりとその場でターンして見せるカナコ。長い袖が揺れ、袴がふわりと風を孕む。

「ああ。似合ってる」

その日本人然とした容姿のためか、カナコは和装が似合う。まあ、美人は何も着ても似合うのかもしれないが。

「ふふ。ありがとうございます。実はこれ、ハロウィン用の仮装なんですよ」

両手を後ろに組んで、少しだけ上体を前に傾けながらカナコが言う。心なしか、今日は少しだけはしゃいでいるように見える。普段はあまりテンションが高いタイプではないので、相対的にそう感じるだけかもしれないが。

「ハロウィン？　なんでまた？」

たった一ヶ月会わないうちに、妹はリア充化し、パーリーピーポーになってしまったのだろうか。

「タオエンに誘われたんです。人数は多い方がいいとか」

「そういう事か。まあ、普段着じゃないし、場所によっては仮装……なのか？」

自信がないので後半は疑問形になってしまったが、日本におけるハロウィンの仮装にルールはない。普通は魔女やカボチャだが、パーティーグッズの衣装でも問題ない風潮がある。

「ちゃんとハロウィンらしい要素もありますよ――ほら」

そう言って、カナコは袖口から何かを取り出すと、それを頭部に装着して見せた。

ネコミミだ。

「にゃーん……なんて」

勢いで付けてみたものの、似合っているかどうかは自信がない――カナコの表情からは、そんな様子がありありと伝わってくる。

「……」

「……な、何か言ってくださいよ」

俺の無言を否定的な意味に取ったのか、カナコは居心地悪そうに顔を俯け、窺うような目を向けてくる。

「あー、いや……似合ってるぞ」

「え……？」

俺の言葉が予想外だったのか、顔を上げたカナコはきょとんとしていた。これは言うべきか迷ったが、まあ、別に引かれはしないだろう。

「――俺、ネコミミ萌えなんだ」

正確にはケモノミミ全般だが、強いて種類を限定すれば猫の耳が好きだったりする。

というか、単純に猫自体が好きなのだが。

「そうですか……兄さんはネコミミがお好きなんですね」

「すごく似合ってるぞ」

「!?　そ、それはもう聞きました……っ！」

珍しくカナコが声を荒げた。それだけではなく、動揺に近い様子で頬を赤らめている。

「どうした？」

「別にどうもしていませんが……？」

平静を装うとしているが、カナコは顔を背け、俺と目を合わせようとしない。

……ひょっとして、照れているのだろうか。

「――カナコ、もう一回、『にゃーん』って言ってみ？」

むくむくと沸き起こる衝動を抑えられず、俺はそんな要求をした。更にカナコの頬が赤くなり、明らかにテンパっているのが判る。

ヤバい。これは楽しい。

「ほら。猫のポーズで、可愛く、それでいて獲物を狙うように」

「に、兄さん……」

普段の落ち着いた佇まいからは想像出来ない、弱々しい声音で言い、カナコは俺に抗議の目を向けてくる。

若干、涙目になっている妹の姿に、さすがにやりすぎたかと思っていると――

「……にゃ、にゃーん」

両手を『猫の手』にして軽く掲げ、消え入りそうな声で、カナコは俺の意地悪なリクエストに応えた。頬を羞恥の色に染め、それでいて、満更でもなさそうに。

「……ご満足いただけましたか？」

やはり恥ずかしそうに、それでいて期待の眼差しを俺に向けながら、カナコは言った。

絶句というのは、まさに今の俺の状態を言うのだろう。自分でやれと言っておきながら、これほどの威力があるとは思っていなかったのだ。

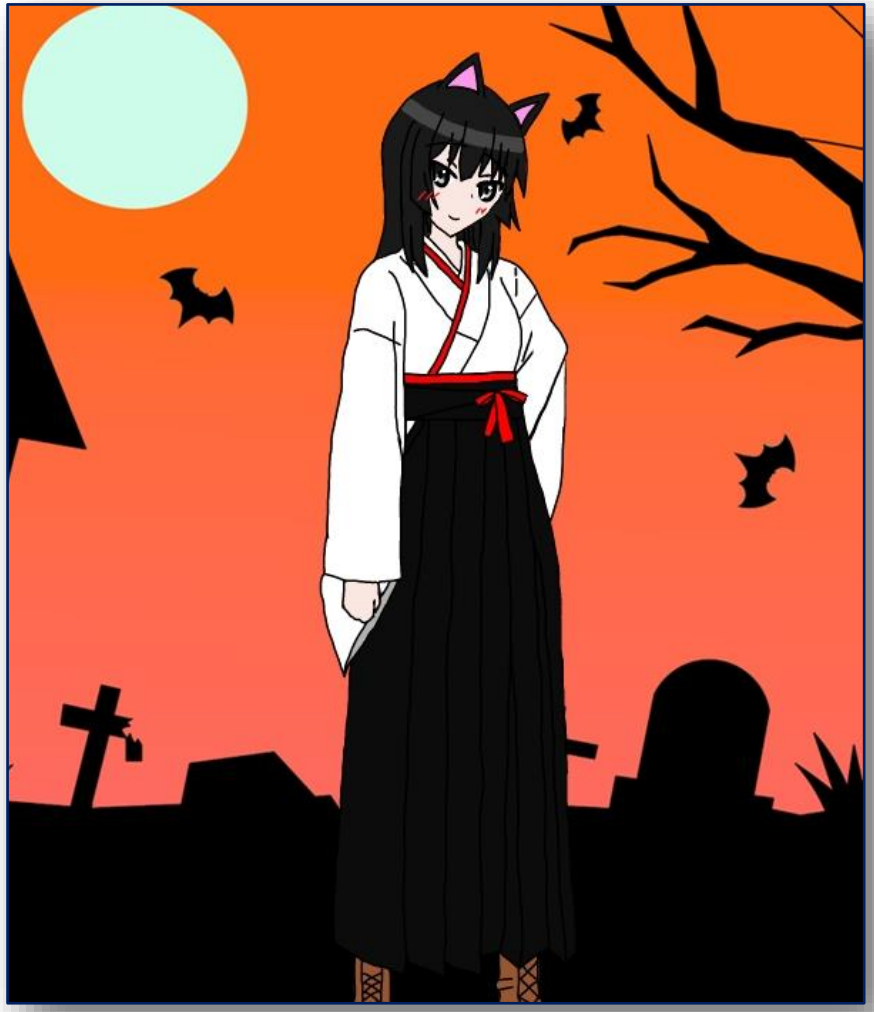
それほどまでに先ほどのカナコの姿は――強烈だった。

「……」

今の無言の意味は察してくれたようで、カナコはそれ以上は何も言わずに、くすりと微笑(ほほえ)んだ。

……やはり、俺達兄妹は、少しおかしいのかもしれない。

Mission complete



あとがき

どうも、流遠亜沙（るとおあさ）です。

『そーりょくせんっ！』四戦目をお届け致します。

ハロウィンです。

本来はジャック・オー・ランタン（カボチャのあれです）のお面を付けて、「ハロウィンですが何か？」と、やっつけ感バリバリな挿絵のつもりでしたが、戯（たわむ）れにネコミミを付けてしまったばかりに、こんな内容になりました。

あたしの馬鹿！　でも、後悔なんてしてないんだからね！（無駄ツンデレ）

ちなみに、『そーりょくせんっ！』のカナコは、『あなたといるから』とも『ゾイやみ』とも、かなり違う印象を受けるかもそれませんが、アサトに対してはこういうキャラです。

むしろ、このシリーズのアサトのキャラが崩れつつある……。

それでは謝辞を。

ここまで読んでくださった『あなた』に感謝を。

ぶっちゃけ、『妹』って、どうですか？

アリですか？　ナシですか？

肯定派がいなければ、さすがに自重します。いや、趣味で書いてるものとはいえ、読んでもらえないのでは創作の意味が半減してしまうので。やはり、創作は人の目に触れてこそ、完成だと思います。評価してもらえるかどうかは別の話ですが。

２０１６／１０／２６　流遠亜沙

アンケートに答える

『そーりょくせんっ！』ページに戻る